

ラリタヴィスタラの韻律について

外 蘭 幸 一

1. 仏教梵語と韻律

大乘仏教の思想に基づく仏伝文学（仏陀釈尊の伝記文学）であるラリタヴィスタラ（普曜経；方广大莊嚴経）は仏教梵語で書かれた作品である。「仏教梵語」とは「仏教經典で使用されている梵語」の意味であるが、それには大きく分けて、プラークリット語（不正規な俗語）の一種であるパーリ語、正規とされる標準的雅語であるサンスクリット語（古典サンスクリット語）、及び俗語（プラークリット語）とサンスクリット語が混合した「混淆梵語」（Buddhist Hybrid Sanskrit：仏教混淆梵語）がある。第三番目の混淆梵語は「ガーター方言」とも呼ばれ、これだけを特に「仏教梵語」（すなわち狭義の意味での「仏教梵語」）と呼ぶこともある¹。

混淆梵語としての仏教梵語にも、(1) 純粹の梵語に近いもの、(2) 梵語的な俗語、(3) パーリ語よりもさらにくずれている一種の俗語、という三種の区別が見られる。(1) は説一切有部という部派の經典に使用され、大乘經典の多くもこれで書かれているが、これらは元來(2)の梵語的な俗語で書かれていたが、後に純粹な梵語（古典サンスクリット語）に改められたものであると考えられている。(2) も、元來はプラークリット語で書かれていたものをサンスクリット語に改めようとした過程で、散文（長行）の部分は韻律と関係がないためにサンスクリット語に改めることが容易であったが、韻文（詩節）の部分は韻律との関係でサンスクリット語に改めることが難しく、そのために韻文（ガーター）の部分だけが俗語形のままで残されたものである²。(3) は大衆部に属する説出世部という部派の仏伝文学であるマハーヴァストゥ（Mahāvastu：大事）に使用されているものである。

ラリタヴィスタラ（Lalitavistara；以下Lvと略称する。）は、混淆梵語のうちの上記(2)の「梵語的な俗語」で書かれている。したがって、古典梵語と混淆梵語との両方を念頭に置きながら、特に韻文部分について混淆梵語の語彙や文法を用いて解説しなければならない。混淆梵

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、仏教梵語、混淆梵語、韻律

¹ 「辻直四郎著作集」第四卷、59頁参照。

² 「この俗語形は仏教の經典に使用されている梵語的な俗語であるから、仏教梵語と呼ばれています。また大乘經典の偈頌に見られる俗語であるから、これを偈頌方言と呼ぶ学者もあります。」（水野弘元『經典 その成立と展開』77頁）

語の語彙と文法については、F Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* があり、それによって多大な便益が得られるが、これを全面的に信頼することにも問題がある。Edgerton が典拠とした文献は、いずれも既刊テキストとしての校訂本であり、自ら写本まで遡って精査したものではないために、校訂本の間違いをそのままデータとして用いていることがあるからである。Lv の校訂本としては、S. Lefmann, *Lalita Vistara* (Erster Teil: Text) が最も信頼度の高いテキストであるが、その中にも多くの訂正すべき箇所が含まれており、その点から Edgerton の辞書や文法書にも訂正を要する箇所が散見される。

仏教経典の文章を形式の上から分類すれば、おおよそ次の四種類に分けられる。

- ①偈頌（韻文）のみで書かれているもの
- ②長行（散文）のみで書かれているもの
- ③長行の内容を偈頌で反復する重頌形式のもの
- ④長行と偈頌とを組み合わせるチャンパー形式のもの

Lv は③の重頌と④のチャンパーを混合した形式で書かれている。そのため散文と韻文が交互に置かれ、全体に占める韻文の割合は約45%であり、韻文の比重が比較的高い作品であると言えよう。つまり、内容の約半分を占める韻文部分の解説が作品を全体的に理解する上で必須の作業となるのである。しかも、その韻文は古典梵語ではなく混淆梵語で書かれているので、混淆梵語の韻律を理解することなしには、この作品を読解することは全く不可能である。

偈頌（Gāthā）を最初に作った人々は、単に書いたり読んだりするためにではなく、詠うために作ったのであるから、原初の Gāthā は韻律上完全なものであったことに疑いはない。しかし、後代になってそれが書写される時には、最初の韻律上の配慮はあまり顧慮されることなく、古典サンスクリットの観点からみた場合の不規則な語形や語法のみが懸念されて、できるだけ正規の語形に訂正される風潮が強くなった。韻律の知識を持たない「写字者」（古い写本を書写して新しい写本を作る人）であればあるほど、不規則形を正規系に直す頻度が高くなり、それだけ韻律を破壊する程度も高くなる。現在、われわれが参考にできる写本のどれもオリジナルな韻律を正しく伝えてはいない。したがって、現代の校訂者は多くの写本の比較対象を通じて、韻律に合致するような語形を探す作業にエネルギーを集中しなければならないことになる。しかも、韻律のなかには現在のわれわれが知りえない古代の韻律もあるかもしれないので、単純に自分が知っている韻律に合わせて訂正すればよいというわけにもいかない。そのために結局、韻律に合わないことを承知の上でやむなく本文を決定する場合もあり、韻律は不明のままに校訂作業を進めるしかないということも起こる。本文校訂を行う編者は、よほどの確信をもって韻律を決定できるときにのみ、写本の支持がなくても自分の判断で本文を決定する条件を得ることになる。

要するに、ある経典が混淆梵語で書かれているということは、特に韻文部分に俗語形（不規則形）が頻出するということであり、その部分の解説には韻律に関する知識が不可欠であると

いうことを意味する。どの韻律で書かれているかが分からなければ語形を特定できず、語形が特定できなければ意味も明瞭にならないからである。したがって、Lvの韻律に関しても、R. MitraがLvの最初の校訂本を出版した直後から、多くの研究が発表された。主な先行研究を次に掲げる。

1) E. Müller: *Der Dialekt der Gāthā des Lalitavistara*, Weimar, 1874.

本書の内容は、I 語音論、II 語形論、III 韻律に大別され、ガーター方言の特徴が総合的・体系的に検討されている。

2) S. Lefmann: *Lalita Vistara* (Zewiter Teil: Varianten-, Metren- und Wörterverzeichnis), Halle, 1908.

Lefmannはテキスト校訂の部分を第1巻とし、異読表・韻律・索引を第2巻として公開しているのが、この第2巻のII (Metra)にLvの韻律を、A. Gaṇachandas, B. Mātrāchandas, C. Axarachandas (I Samavṛttam, II Ardhāsamavṛttam, III Viṣamavṛttam)の順にまとめている。

3) F. Edgerton: *Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit* (JAOS 66, 1946)

仏教混淆梵語の韻律、音韻論、正字法に関する論文であり、典拠としてLvの他に、Mahāvastu, Divyāvādāna, Laṅkāvatāra Sūtra (楞伽經), Gaṇḍavyūha (華嚴經), Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra (法華經)などが用いられている。

4) H. Smith: *Les Deux Prododies du Vers Buddhique* (Bulletin de la Société Royale des Lettres de Lund, Lund, 1949–1950, pp. 1–43)

Lvを含む仏教梵語経典 (Mahāvastu, Divyāvādāna, Saddharmapuṇḍarīka等)の韻律を検討しており、特に、Lvに含まれている古形の韻律が解説され、Lefmannの校訂本には改められるべき点のあることが指摘されている。

5) W. Schubring: *Zum Lalitavistara* (Asiatica/Festschrift Friedrich Weller), 1954, pp. 610–655)

Lefmann校訂本の全体にわたって検討し、誤植や句読法、単語の分離や結合等に関する訂正や提案を交えた注解を施しており、韻文部分についてはそれぞれの韻律名を示している。そして、ここに掲げられた韻律の名称は30余種にのぼっている。

6) Śāntibhikṣu Śāstrī: *Lalitavistara*, Lucknow, 1984.

本書はLvのヒンディー語訳であるが、韻文 (Gāthā) の箇所についてはサンスクリット原文を示すとともに、韻律の名称も挙げているので、各偈の韻律名称を確認するのに便利である。

7) A. Mette: *Veḍhas in Lalitavistara und Divyāvādāna, Beschreibungen des Schönen Körpers in Sanskrit und Prakrit* (WZKS Bd. 17, 1973, pp. 21–42)

LvとDivyāvādānaに見られる「美しい肉体に関する描写」に、プラークリットの特徴的な韻律であるVeḍhaが共通に用いられていることを指摘している。特に、Lvの第3章の

「マーヤー妃の身相」に関する原文 (Lefmann 校訂本, pp.26-27) を掲示して, 校訂本では散文で記載されているにもかかわらず, 韻文の様式を含むものとして復元できることが示されている。

古典梵語 (サンスクリット) の韻律については, V. S. Apte, *The Practical Sanskrit- English Dictionary* に付録された Appendix A (Sanskrit Prosody) が簡便にして活用しやすい。この付録には, 韻脚 (gaṇa) の略称を用いた多種の韻律のリストが掲げられ, 各韻律の名称が提示されている。現在のところ, この Apte の韻律表に掲げられていないものは「名称不明」とせざるを得ない状況にある。Apte の韻律表の末尾には, 「これ以上の特殊なものについては, H. D. Velankar によって編集 (1949) された Jayadāman を参照せよ」との注記がある。これは *Jayadāman (A collection of ancient texts on Sanskrit Prosody and A Classified List of Sanskrit Metres with an Alphabetical Index)* という図書を指しており, 表題のとおり, サンスクリット韻律に関する古書を集成しその内容を紹介するとともに, 多くの韻律の形式とその名称をリスト化したものである。集成されている韻律書は Jayadeva の *Jayadevachandas*, Jayakīrti の *Chandonuśāsana*, Kedāra の *Vṛttaratnākara*, Hemacandra の *Chandonuśāsana* の四冊である。また, それらの内容からリスト化された韻律の種類は約850であり, そのうちの600以上が Varṇavṛtta (各行の音節数が同じである四行句) であり, 33の Daṇḍaka と, 50の Ardhasama-Catuṣpadī (半分ずつの行の音節数が同じ四行句) と, 36の Viṣama-Catuṣpadī (各行の音節数が異なる四行句) と, 42の Mātrāvṛtta (Mātrā の数で測る韻律) の名称が掲示され, 最後の Mātrāvṛtta のなかで14は二行から成る詩句であり, 28は四行から成る詩句である³。この *Jayadāman* のリストと Apte の韻律表とを比較してみた場合, 内容的にみてあまり差異がない。Apte の韻律表に見当たらないものは *Jayadāman* のリストにも見当たらないという状況にあり, これは「前者が後者に基づいて作られた」ということによるものと考えられる。したがって, Apte の韻律表に見当たらないものを「名称不明」とせざるを得ない状況は, *Jayadāman* を参照しても少しも解消されないということになる。

なお, パーリ語の韻律については, A.K.Warder, *PALI METRE A Contribution to the History of Indian Literature*, 片山一良「『ヴットーダヤ』訳註 (VUTTODAYA) —パーリ韻律論—」などがある。

2. サンスクリット語の韻律 (Meter) の基礎知識

1) 一つの Gāthā (偈; 頌; 偈頌) は一般に4行から構成され, それぞれの行を Pāda あるい

³ *Jayadāman*, p. 56.

は Pada (パーダ; パダ:「四分の一」の意) と呼ぶ。

2) 音節の長短に関する規則は次のとおりである。

- ①短母音1個を含む音節は「短い」(short) 音節である。
- ②長母音あるいは二重母音を含む音節は「本来長い」(long by nature) 音節である。
- ③短母音を含む音節であっても、母音の後ろに2個以上の子音 (Consonant Cluster) が続くときは「位置によって長い」(long by position) とされる。

3) 諸々の Pāda の後半に見られる定型的反復を Cadence (カデンス) と呼ぶ。

4) [--] (長・長) は spondeus, [-~] (長・短) は trochaeus, [~-] (短・長) は iambus, [~~] (短・短) は pyrrhichius, [~::~] (長・短・短・長) は choriambus などと呼ばれる。⁴

5) 一つの短母音を発音するのに要する時間単位⁵を 1 mātrā (one mora: いちモーラ) と呼ぶ。

6) 3個の音節を一つのまとまりとして韻律の構造を示す場合、その3音節の組み合わせ (Gaṇa: ガナ; 韻脚) を次のような略称で呼ぶ。

- ① [---](Bacchius; 5 moras) = ya- gaṇa
- ② [~--](Amphimacer; 5 moras) = ra- gaṇa
- ③ [--~](Anti-bacchius; 5 moras) = ta- gaṇa
- ④ [~::~](Dactylus; 4 moras) = bha- gaṇa
- ⑤ [~--~](Amphibrachys; 4 moras) = ja- gaṇa
- ⑥ [~::~~](Anapaestus; 4 moras) = sa- gaṇa
- ⑦ [----](Molossus; 6 moras) = ma- gaṇa
- ⑧ [~::~~](Tribrachys; 3 moras) = na- gaṇa

* [~] (短音ひとつ) は la(= laghu) と呼び、[-] (長音ひとつ) は ga(= guru) と呼ぶ。la は 1 mora, ga は 2 mora である。

7) Gaṇa (韻脚) を 4 mora で統一する場合、四音節のもの [~::~~], 三音節のもの [~::~] [~--~][~--], 二音節のもの [--] に分かれることになる。そのような Gaṇa の数によって測る韻律 (例えば Āryā) は Gaṇacchandās と呼ばれる。

8) 各行の音節数が固定された韻律は Akṣaracchandās (Varṇavṛtta) と呼ばれる。

9) Akṣaracchandās に属する韻律の中で、第1 Pāda (行名 a), 第2 Pāda (行名 b), 第3 Pāda (行名 c), 第4 Pāda (行名 d) の音節数がいずれも同じであるものは Samavṛtta (各行の音節数が同じ韻律) と呼ばれる。

10) Akṣaracchandās に属する韻律の中で、a 行 = c 行; b 行 = d 行となっているものは

⁴ これら種々の音韻組織の名称に関しては、Hermer Smith: *Inventaire rythmique des Pūrva-Mīmāṃsā-sūtra* (1953, Uppsala, pp. 5-9) に詳しい表が提示されている。

⁵ 片山一良 (1973) には、mattā(=mātrā) とは「健全な人がまばたきを一回する間の時間に等しい音長であり、これは短母音の発音時間に相当する」との説明が見られる (128頁)。

Ardhasamavṛtta (半分ずつの行の音節数が同じ韻律) と呼ばれる。

- 11) a 行, b 行, c 行, d 行のいずれの Pāda の音節数も一致しないものは Viṣamavṛtta (各行の音節数が異なる韻律) と呼ばれる。
- 12) 音節数が固定されておらず, mātṛā (mora) の総量を合わせる形式をとる韻律 (例えば Vaitāliya) は Mātrāchandas(Mātrāvṛtta) と呼ばれる。

3. 仏教梵語における韻律の特例的規則

§1 二つの短音 (◌◌) を一つの長音 (◌◌) によって置き換えることができる。その逆も可能である。

§2 -ḥ(Visarga), -ṁ(Anusvāra) で終わる音節は常に長音である。

§3 -ḥ は、韻律の要求に応じて省略され、短音化することがある。

* 例. duḥkha [苦] → dukha

§4 語末に短母音があり、次の語の冒頭音節が2個以上の子音 (Consonant Cluster) で始まっている場合、その短母音は長 (◌◌), 短 (◌) のいずれとも見なされうる。

この用法は複合語 (compound) の中でも起こり、場合によっては一つの単語内でも起こりうる。

* 例. smara smara anantakīrte (Āryā の a 行) → 最初の smara の ra は短音
tava puṇyaśriyātiśobhate śrīmān (Āryā の b 行) → puṇya- の ya は短音
saṃbodhisattvās ca viśālaprajñā (Upajāti) → viśālaprajñā の la は短音
bhāvī dvātriṃśallakṣaṇōpetāḥ (Gīti の d 行) → -śallakṣa- の śa は短音, la は長音
prajñāpradīpena vidhamathā sarvaṃ (Āryā の b 行) → prajñā- の pra は短音
adhruvaṃ na ca śāśvatā supina kalpāḥ (Āryā の b 行) → adhru- の a は短音

§5 各 Pāda の最後にある短母音は長音化する。

§6 「Pāda 中に置かれる休止」(Caesura: シジユラ) の前では、短母音であっても、長 (◌◌) と見なされうる。

§7 三 Pādas (3行) から成る偈頌や、五 Pādas (5行) あるいは六 Pādas (6行) から成る偈頌がありうる。

* 例. 3行で一偈のもの…Lv 第24章の第73, 115, 118, 124, 127, 133, 136, 142, 145偈

5行で一偈のもの…Lv 第7章の第14偈

6行で一偈のもの…Lv 第7章の第29偈, 第17章の第10偈

§8 -ch(-cch) の前に短母音がある場合、通常は常に「位置による長音節」をつくる。しかし、-ch と -cch は仏教梵語の写本中において同じ字形で示され、区別の意識が薄く、自由に交換可能である。したがって、-ch(-cch) の前にある短母音は、長 (◌◌), 短 (◌) のいずれ

とも見なされうる (cf. BHSG, §2.20)。

* 例. mā gacchata punar apāyān (Āryā の c 行) → gacchata の ga は短音

§9 鼻音 (ñ, n̄, ṅ, n, m) は Anusvāra (ṁ) と自由に交換可能であり, Anusvāra は韻律の要求によって省略することが可能である。したがって, 次のようなことが起こる。

* 例. kumbhāṇḍa → kuṁbhāṇḍa → kubhāṇḍa (つまり, ku- が短音化する)

§10 前接辞に先行された語頭の母音は長音化することがある (cf. ドウ・ヨング『仏教研究の歴史』74頁参照)。

* 例. an-ābhibhūto (cf. BHSG, §3.11)⁶

なお, これに限らず, 韻律に合わせるのための「短音の長音化」や「長音の短音化」は頻出する。

§11 重韻 (guṇa) に属する e と o は本来長音であるが, 韻律の要求に従って短音化することがある (cf. BHSG, §3.64 & §3.74)。

§12 √drś の過去形において, ad- の形は add- と見なされ, 長音節となることがある。

* 例. adrśāti → a(d)drśāti

§13 pariḡhīta, pratigḡhīta 等において, g が gg と見なされ, その前の短母音 (i) が長音と見なされることがある (cf. JAOS 66, Edgerton 論文 p.201参照)。

§14 前項と同じような用法として, 短母音の後ろに来る語頭の子音 (特に d-, j-) が重複されて, その短母音を長音化することがある (cf. BHSG, §2.78–82)。

* 例. daśa-diśāsu → daśa-(d)diśāsu : sarva-jagad → sarva-(j)jagad

§15 ある韻律 (特に Vaitāliya) では, Pāda の冒頭 (Opening) において若干の音節の付加や不規則 (韻律不合) を認めることがある。

§16 意味の整合性を優先して, あえて韻律を無視することがある。

* 例. Lv 第24章の第82偈第1行 (Śloka の a, b 行)

ayaṁ lokāḥ samtāpajātaḥ śabda-sparśa-rasa-rūpa-gandhaiḥ

(この世間は, 声・触・味・色・香によって, 煩悶を生じたり)

a 行は8音であるべきところが9音になっており, その点で韻律に合わないが, sam を省けば韻律に合わせることができる。しかし, b 行は8音であるべきところが10音になっており, しかも意味の整合性の観点から, 色・声・香・味・触という五境 (五官の対象) のどれも省略できないので, あえて韻律を無視した形式を採っていると思われる。

⁶ これは an-ānupaśyi (短音節の3個以上連続を避けるため, 否定接頭辞 an- の後に起こる母音延長) と同様の事例とも見なされうる。中谷英明『スバシ写本の研究』32頁参照。

4. 諸種の韻律

§1 Samavṛtta (各行の音節数が同じ形式の韻律)

1. Citragati (10音)

- - - | - - - | - - - | - [bha × 3 + ga]

2. Triṣṭubh (11音×4行)

	opening	break	cadence
① Indravajrā	- - - -	- - - -	- - - -
② Upendravajrā	- - - -	- - - -	- - - -
③ Upajāti	≡ - - -	- - - -	- - - -

3. Dodhaka (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [Citragati + ga]

4. Svāgatā (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [ra na bha ga ga]

5. Rathoddhatā (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [ra na ra la ga]

6. Bhramaravilasita (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [ma bha sa la ga]

7. Sumukhī(Drutapādagati) (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [ta ja ja la ga]

8. Moṭaka(Moṭanaka) (11音)

- - - | - - - | - - - | - - [ma bha sa la ga]

9. Jagatī (12音×4行)

① Indravamśa	- - - -	- - - -	- - - -
② Vaṃśastha	- - - -	- - - -	- - - -
③ Vaṃśamālā	≡ - - -	- - - -	- - - -

10. Pramitākṣarā (12音)

ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | [sa ja sa sa]

11. Toṭaka (12音)

ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | [sa × 4]

12. Bhujāṅgaprayāta(Aprameyā) (12音)

ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | [ya × 4]

13. [ya-gaṇa で終わる] Candravartman (12音)

ー ー ー | ゝ ー ー | ー ー ー | ー ー ー | [ra na bha ya]

Apte の韻律表によれば、通常の Candravartman は sa-gaṇa[ゝ ー ー] で終わる形式 [ra na bha sa] であるが、Lv の第20章第8偈は ya-gaṇa で終わる形式を採っている。

14. Drutavilambita (12音)

ゝ ー ー | ー ー ー | ー ー ー | ー ー ー | [na bha bha ra]

15. Modaka(Bhāminī)? (12音)

ー ー ー | ー ー ー | ー ー ー | ー ー ー | [bha × 3 + ra]

Lv の第20章第5偈はこの韻律であり、Sāntibhikṣu Sāstrī: *Lalitavistara* (562頁) によれば、この韻律は Modaka (= bhagaṇārabdha drutavilambita : bha-gaṇa で始まる Drutavilambita) である。しかし、Apte の韻律表によれば Modaka は [bha × 4] の形式のものとされており、[bha × 3 + ra] の形式を採るものは掲げられていない。

16. Rucirā (13音)

ゝ ー ー | ー ー ー | ゝ ー ー | ー ー ー | ー | [ja bha sa ja ga]

17. Praharṣiṇī (13音)

ー ー ー | ゝ ー ー | ゝ ー ー | ー ー ー | ー | [ma na ja ra ga]

18. Aṅgaruci (13音)

ー ー ー | ー ー ー | ー ー ー | ー ー ー | ー | [bha × 4 + ga]

19. Atijagatī [13音節の韻律の総称] の一種 (13音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — [ta ta na ra ga]

Lv の第15章第96～120偈はこの形式の韻律であるが、Apte の韻律表に見当たらない。

20. Vasantatilakā (14音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — [ta bha ja ja ga ga]

21. Śakvarī [14音節の韻律の総称] の一種 (14音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — [ma sa ja bha ga ga]

Lv の第21章第100～109偈は、この形式の韻律であるが、Apte の韻律表に見当たらない。

22. Nālinī (15音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — — | [sa × 5]

23. Śaśikalā(Candravartā) (15音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — — | [na × 4 + sa]

*8音+7音 [— — — — — — — — — — — — — — —] の形式は Maṇiguṇanikara と呼ばれる。

24. Aśvagatī(Padmamukhī) (16音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — — | — [bha × 5 + ga]

25. Śikharinī (17音)

— — — | — — — | — — — | — — — | — — — | — — [ya ma na bha sa la ga]

26. Hariṇī (17音)

— — — | — — — , | — — — | — — — , | — — — | — — — | — — [na sa ma ra sa la ga]

27. Vaṃśapattrapatita(Vaṃśadala) (17音)

— — — | — — — | — — — | — — — , | — — — | — — — | — — [bha ra na bha na la ga]

28. Atyaṣṭi [17音節の韻律の総称] の一種 (17音)

— — — | — — — | — — — | — — — , | — — — | — — — | — — [ma sa ja bha na la ga]

Lv の第9章第1～5偈、第19章第52～56偈、及び第23章第31～35偈は、この形式の韻律であるが、Apte の韻律表に見当たらない。

$$[\sim \sim \sim \sim \sim \sim] + \begin{cases} [- \sim -] \text{の繰り返し} \cdots \cdots \text{ra-gaṇa の Daṇḍaka} \\ [- \sim -] \text{の繰り返し} \cdots \cdots \text{ya-gaṇa の Daṇḍaka} \\ [- \sim -] \text{の繰り返し} \cdots \cdots \text{sa-gaṇa の Daṇḍaka} \end{cases}$$

<6 moras>

§2 Mixture of more than two Rhythms (行ごとに異なる形式が混在するもの)

1. Mixture of Upajāti and Vaṃśamālā (11音または12音)

a 行, b 行, c 行, d 行に任意に次の形式のどちらかを探る。

≡ - - - | - - - | - - - | (Upajāti)

≡ - - - | - - - | - - - | - (Vaṃśamālā)

2. Mixture of Pramitākṣarā and Toṭaka (12音)

a 行, b 行, c 行, d 行に任意に次の形式のどちらかを探る。

~ ~ - | ~ - - | ~ ~ - | ~ ~ - | (Pramitākṣarā)

~ ~ - | ~ ~ - | ~ ~ - | ~ ~ - | (Toṭaka)

3. Śālinī (11音または12音)

冒頭に短音2個か長音1個のいずれかを探る。

~ ~ - - | - , - - | - - - | - -
Caesura

4. Mālinī (14音または15音)

冒頭に短音2個か長音1個のいずれかを探る。

~ ~ ~ ~ ~ ~ - - , [- ~ ~ ~ ~ ~ ~ - -]
cadence
Caesura

5. Pañcacāmara

$[- \sim -] \times 8$ (計16音) の形式を探るが, 第一区切り (opening) において極めて自由である。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

~ - | ~ - | ~ - | ~ - | ~ - | ~ - | ~ - | ~ - |

1) 第一区切りを欠くことができる。 $[- \sim -] \times 7$ (14音)

2) 冒頭の短音を欠くことができる。 $[-] + [- \sim -] \times 7$ (15音)

3) 二番目の長音を欠くことができる。 $[- \sim] + [- \sim -] \times 7$ (15音)

4) 第一区切りが $[- -]$ であることができる。 $[- -] + [- \sim -] \times 7$ (16音)

5) 第一区切りが $[- \sim]$ であることができる。 $[- \sim] + [- \sim -] \times 7$ (16音)

6) $[- \sim]$ を一箇, 最初に付加することができる。 $[- \sim] + [- \sim -] \times 8$ (17音)

- 7) [-]を一箇、最初に付加することができる。 [-] + [~ -] × 8 (17音)
 8) [~ -]を一箇、最初に付加することができる。 [~ -] × 9 (18音)
 9) [- ~]を一箇、最初に付加することができる。 [- ~] + [~ -] × 8 (18音)

6. Mixture of Toṭaka, Nālinī, Moṭaka, Citragati, Sumukhī, Aṅgaruci, Aśvagati etc.

各行の韻律に統一性がなく、Apteの韻律表にないものを含めて10種以上の韻律が混在している。2行あるいは3行が同じ韻律である場合も含まれるので、Viṣamavṛttaに属するものでもない。

Lvの第21章第90~99偈は、この種の韻律である。

§3 Ardhasamavṛtta (奇数行と偶数行で同じ形式を採る韻律)

1. Śloka [8音×4行] (16音×2行で表示する)⁷

- | | |
|--|---|
| a | b |
| 1) Pathyā ≍ ≍ ≍ ≍ ~ - - ≍ ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍ | |
| c | d |
| ≍ ≍ ≍ ≍ ~ - - ≍ ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍ | |
| ↓ ↓ | |

この両方が同時に(~~)であることはできず、いずれか一方が、あるいは両方ともに(-)でなければならない。

またb行とd行において、第2~4音節が[-~-]となつてはならない⁸。

以上の規則は、下記の諸 Vipulā においても同じである。

2) Vipulā (a行やc行の第5~7音節が採る gaṇa に応じて、次のような形式に分かれる)

- ① ra-vipupā ≍ ≍ ≍ - ~ ~ ~ ≍ | ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍
- ② bha-vipulā ≍ - ~ ~ - ~ ~ ~ ≍ | ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍
- ③ sa-vipupā ≍ ≍ ≍ - ~ ~ ~ ≍ | ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍
- ④ ma-vipupā ≍ - ~ ~ - -, - - - ≍ | ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍
- ⑤ na-vipupā ≍ ≍ ≍ - ~ ~ ~ ≍ | ≍ ≍ ≍ ≍ ~ ~ ~ ≍

2. Vegavatī

- | | | |
|------|-------|-----------------------------------|
| a, c | | ~ ~ - ~ ~ - ~ ~ - - (10音) |
| b, d | | - ~ ~ - ~ ~ - ~ ~ - - (11音) |

⁷ 第1行(a + b行)と第2行(c + d行)が同じ形になるので Samavṛtta として扱うことも可能であるが、a = c : b = d という形式を重視して、ここでは、適切な処理ではない可能性を承知のうえで、あえて Ardhasamavṛtta に分類する。

⁸ 中谷英明『スバシ写本の研究』71頁、§106参照。

3. Viyojinī (Vaitālīya の一種)

- a, c ◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - | (10音)
 b, d ◡◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - | (11音)

4. Bhadravirāj (Aupacchandasika の一種)

- a, c | - - ◡ ◡ | - ◡ - ◡ - - | (10音)
 b, d - | - - ◡ ◡ | - ◡ - ◡ - - | (11音)

5. Aparavaktra (Vaitālīya の一種)

- a, c ◡◡◡◡◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (11音)
 b, d ◡◡◡◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (12音)

6. Mālabhāriṇī (Vasantamālikā)

Viyojinī + [-] の形式を採る。

- a, c ◡◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (11音)
 b, d ◡◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (12音)

9. Puṣpitāgrā

Aupacchandasika の一種であるが、Varṇavṛtta に属するので音節数を変更できない。

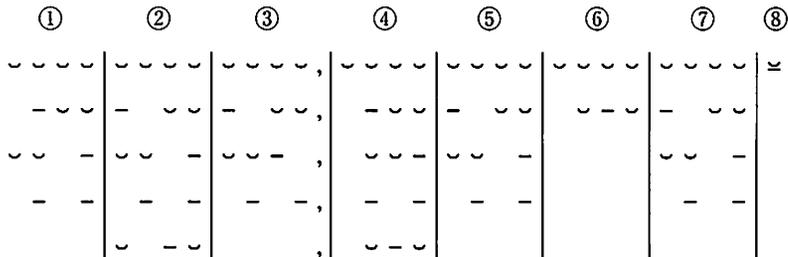
- a, c ◡◡◡◡◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (12音)
 b, d ◡◡◡◡---◡◡ | - ◡ - ◡ - - | (13音)

§4 Mātrāchandas (mora の数を単位とする韻律)

1. Āryā (2行で表示する)

1) Āryā Pathyā (最も一般的な Āryā)

a, b 行 (第1行) は、次の形式を採る (①~③が a, c 行, ④~⑧が b, d 行)。



c, d 行 (第2行) は、第6区切りが [-] となるが、他は第1行と同じである。

○第2行も第1行と同じ形式を採る場合は、Giti と呼ばれる。

○第1行が第2行と同じ形式を採る場合は、Upagīti と呼ばれる。

○第1行と第2行が逆の形式を採る場合は、Udgīti と呼ばれる。

2) Āryā Vipulā

Pathyā と同じ音韻配列であるが、第3 gaṇa の後の休止 (caesura) が見られない場合は Vipulā と呼ばれる。

3) Āryāgīti(Skandhaka)

Gīti の行末にそれぞれ2 mora を付加した形式を採る。

2. Vaitāliya (Ardhasamavṛtta の形式を採る)

cadence

a 行, c 行においては, 6 moras(u u u) + [- u - u -]

b 行, d 行においては, 8 moras(u u u u) + [- u - u -]

ただし, b 行, d 行の opening においては若干の不規則が許容されるので, 次のような形式となることがある。

- ① u | u u u | - u - u - |
- ② - | u u u | - u - u - |
- ③ u - | u u u | - u - u - |
- ④ - u | u u u | - u - u - |
- ⑤ u u u | u u u | - u - u - |

3. Aupacchandasika

Vaitāliya + [-] の形式を採る。

a, c …………… 6 moras(u u u) + [- u - u -]

b, d …………… 8 moras(u u u u) + [- u - u -]

4. Mātrāsamaka

各 Pāda が [4 moras × 4] の形式をとるが, 最初の4 mora が [u-u] (ja-gaṇa) であってはならず, 第9音が短音でなければならない。

また, 短音と長音の配置によって, 次のように呼ばれる。

- ①第9音と第10音が長音ならば Upacitrā
- ②第5音と第8音が短音ならば Viśloka
- ③第5音と第8音と第9音が短音ならば Citrā
- ④第9音と第12音が短音ならば Vānavāsikā

5. Mātrāchanda の一種 : [4 mora × 6] の形式を採るもの

[~ ~ ~ ~][~ ~ ~][~ ~ ~][~ ~ ~][~ ~ ~][~ ~ ~] (すべて4 mora の gaṇa) を6個合わせて1行とし、3個目の終わりに休止のある韻律 (12 moras + 12 moras) であるが、Apte の韻律表に見当たらない。

Lv の第15章第86~95偈は、この種の韻律である。Śāntibhikṣu Śāstrī: *Lalitavistara* (435頁) には、この韻律について Gāthā, Ṣoḍaśākṣarī Aṣṭijātyā (16音節から成る Aṣṭi に属する Gāthā) と注記している。しかし実際には、この韻律は音節数が固定しておらず、14個から18個にまでわたる音節数で構成されているので、この注記は適切ではないと思われる。

6. Mātrāchanda の一種 : (5 moras or 6 moras + [~ ~ ~]) × 2行の形式を採るもの

合計で5 moras または6 moras を含む複数の音節があり、その後 [~ ~ ~] の cadence を成す4音節がある。それが2個集まって1行 (a, b 行) を成し、同じ形式の第2行 (c, d 行) を足して1偈を構成する。

Lv の第22章第6~25偈は、この種の韻律であると思われるが、詳細は不明である。Śāntibhikṣu Śāstrī (666頁) は単に Gāthā Ṣoḍaśākṣarī (16音から成る gāthā) と注記しているが、1行の音節数は14音、15音、17音もあり一定しない。

§5 Viśamavṛtta (各行において音節数の異なる韻律)

1. Lalita or Dohā (?)

a 行 : ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ [sa ja sa la] (10音節)

b 行 : ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ [na sa ja ga] (10音節)

c 行 : ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ [na na sa sa] (12音節)

d 行 : ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ ~ ~ | ~ [sa ja sa ja ga] (13音節)

Lv の第15章第31偈の上半分 (a, b 行) は、a 行の末尾の長音を短音にすれば、Lalita の上2行に合致するので、H. Smith (p. 21) は、これを Lalita と見ている。しかし、下半分 (c, d 行) は全く Lalita に合致しない。Lefmann (II, p. 229) は、この第31偈から次の第32偈までを含めて、Ṣaṭpadā (6行から成る韻律) の Dohā ([13+11] × 2) であるとし、W. Schubring も Dohā とするが、H. Smith (p. 28) は Dohā ではないと見ている。Śāntibhikṣu Śāstrī は単に Ṣaṭpadī (6行の詩節) と記しており、韻律名は不明のままである。

したがって、第32偈の韻律も不明であり、H. Smith (p. 27) はこの偈を5行に分けて、上から順に5 gaṇas, 5 + 1/2 gaṇas, 5 + 1/2 gaṇas, 6 + 4 + 4 + 2 moras, 6 gaṇas から成ると分析している。しかし、第2行と第3行の音節数は同じではないので、5行がいずれも異なる形式を有することになる。

2. 6 + 4 + 4 + 2 moras + (7 gaṇas, 8 gaṇas, 9 gaṇas)

直前の第31偈、第32偈に続くLvの第15章第33偈も韻律名は不明であるが、H. Smith (p. 27) の分析を参考に数えてみると、6 moras + 4 moras + 4 moras + 2 moras の後に4 mora から成る gaṇa が7個、7個、8個、9個の順で付いている。つまり、次のような構成を成している。

a 行 : 6 + 4 + 4 + 2 moras + 7 gaṇas

b 行 : 6 + 4 + 4 + 2 moras + 7 gaṇas

c 行 : 6 + 4 + 4 + 2 moras + 8 gaṇas

d 行 : 6 + 4 + 4 + 2 moras + 9 gaṇas

この場合も、a 行（第1行）と b 行（第2行）の音節数は同じではないので、4行がいずれも異なる形式を成していることになる。

§6 Gadyagati (散文調の韻律)

厳密には韻律のない長行（散文）であるが、文章の構成が同じパターンを繰り返すことによってリズムカルな調子を醸し出しているものである。日本語に訳してみると、同じ調子の繰り返しを持つ詩であって、単なる散文ではないことが了解される。Lvの第21章第139～162偈は、この種の詩節である。

*なお、上記（1. 仏教梵語と韻律〈先行研究の7〉）のMetteによって指摘されている、Lvの第3章「マーヤー妃の身相」に関する原文（Lefmann 校訂本, pp. 26～27）も「散文調の韻律の一種」であろうと思われるが、これを韻文として扱っている校訂本は存在せず、チベット訳でも散文として扱われている。われわれとしても、これを韻文と見て偈番号を付することができるほどには当該箇所を明瞭に特定することができなかった。

5. Lvに見られる韻律の特徴

Lvに用いられている韻律を、偈頌数の多い順に並べ、当該の章と偈番号を付して示せば、次のようになる。なお、確定的でないものには疑問符(?)を付けてある。

1) Vasantatilakā…計239偈

第5章3～17偈, 38～47偈

第7章74～95偈

第8章1～3偈

第10章1～5偈

第11章15～32偈

第12章3～12偈, 15～16偈, 23偈, 25偈, 29～31偈, 39～45偈

第14章1～11偈, 13～15偈, 40～47偈

第15章1～10偈, 22偈, 50偈

第20章3偈, 10～29偈

第21章1～14偈, 25～28偈, 45～46偈, 49偈, 89偈, 132～137偈, 165～170偈,

173～177偈, 179～198偈, 200～203偈

第22章2～5偈, 26～30偈

第26章27～41偈

2) Śloka…計209偈

第6章13～21偈

第7章29～32偈, 36偈, 43～53偈

第10章6～10偈

第11章5～11偈, 13偈

第12章13～14偈, 21～22偈, 34～38偈

第15章23偈

第17章3～7偈, 9偈

第18章1～22偈

第19章7～26偈

第21章15偈, 35～41偈

第23章1～11偈

第24章73～82偈, 99～102偈, 108～147偈, 149～150偈

第25章19～20偈

第26章1～6偈, 42～47偈, 52～75偈

3) Āryā Pathyā…計189偈

第2章1～20偈

第13章141～160偈

第15章11～20偈, 36偈, 51偈(?)

第17章11～41偈

第21章33偈, 66～84偈

第24章1～72偈

第25章17～18偈

第26章7～18偈

4) Mixture of Upajāti and Vaṃsamālā…計162偈

第1章1～13偈

第3章1～20偈

第4章1～21偈

第5章1～2偈

第6章21偈

第7章33～35偈

第11章12偈

第12章46偈

第13章133～140偈

第15章24～26偈, 34～35偈, 40～45偈, 53～63偈

第21章55～65偈, 88偈

第23章56～60偈, 62～65偈

第24章83～90偈, 103～107偈, 151～154偈

第25章1偈, 9～16偈, 21～34偈

第27章2～10偈

5) Śārdūlavikrīḍita…計93偈

第7章54～73偈

第8章4～5偈

第11章3～4偈

第14章16～26偈

第15章28～29偈, 64～75偈

第18章23～30偈

第19章1～6偈, 27～41偈

第20章1～2偈, 4偈, 6～7偈

第21章163～164偈, 178偈

第23章21～25偈

第25章35～36偈

6) Vaitāliya…計47偈

第13章93～132偈

第15章49偈

第23章41～45偈

第24章148偈

7) Puṣpītāgrā…計41偈

第6章1偈

第12章1～2偈

第16章1～33偈

第23章51～55偈

8) Rathoddhatā…計39偈

第5章64～78偈, 80～83偈

第15章30偈, 137～156偈

第21章110偈

9) Mālinī…計38偈

第6章3～12偈

第7章1～20偈

第12章33偈

第14章12偈

第22章31～35偈

第23章61偈

10) Pañcacāmara…計34偈

第6章23～37偈

第13章50～67偈

第21章48偈

11) Upajāti…計33偈

第12章19～20偈

第17章1～2偈, 8偈, 10偈

第19章57偈

第21章29～31偈, 34偈, 42～44偈, 50～52偈, 85～87偈, 199偈

第23章12～15偈

第24章91～98偈

12) Aupacchandasika…計30偈

第5章48～63偈

第6章2偈

第12章24偈(?), 26～28偈

第20章9偈(?)

第21章32偈

第25章2～8偈

13) Pramitākṣarā…計30偈

第5章18～37偈

第15章76～85偈

14) Toṭaka…計27偈

第12章32偈

第13章68～92偈

15) Atijagatī の一種 (ta ta na ra ga) …計25偈

第15章96～120偈

16) Gadyagati (散文調の韻律) …計24偈

第21章139～162偈

17) Nārāca (Mahāmālikā) …計23偈

第7章21～28偈, 37～42偈

第23章46～50偈

第26章48～51偈

18) *Vaṃśapattra*[*patita*]…計20偈

第21章111～130偈

19) *Mātrāchanda* の一種 : (5 or 6 moras + [- ~ - -]) × 2行の形式 … 計20偈

第22章6～25偈

20) *Śaśikalā*(*Candravartā*)…計19偈

第13章21～34偈

第23章26～30偈

21) *Āryāgīti*(*Skandhaka*)…計16偈

第15章121～136偈

22) *Atyaṣṭi* の一種 (*ma sa ja bha na la ga*) …計15偈

第9章1～5偈

第19章52～56偈

第23章31～35偈

23) *Atyaṣṭi* の一種 ? (*na ja ja ya bha ga ga*) …計15偈

第13章35～49偈

24) *Dodhaka*…計14偈

第19章48～51偈

第21章16～24偈, 54偈

25) *Śālinī*…計13偈

第14章28～39偈

第27章1偈

26) *Śakvarī* の一種 (*ma sa ja bha ga ga*) …計11偈

第21章100～109偈, 131偈(?)

- 27) Mixture of Toṭaka, Nālinī, Moṭaka, Citragati, Sumukhī, Aṅgaruci, Aśvagati etc. …計10偈
第21章90～99偈
- 28) Mātrāsamaka (4moras × 4) …計10偈
第13章11～20偈(?)
- 29) Mātrāchanda の一種 : 4 moras × 6 (12 moras + 12 moras) の形式 …計10偈
第15章86～95偈
- 30) Daṇḍaka(ra-gaṇa の Daṇḍaka) …計9偈
第11章2偈
第15章21偈, 38～39偈, 46～47偈
- 31) Bhramaravilasita …計8偈
第13章1～8偈
- 32) Dhṛti の一種 (sa × 6) …計8偈
第26章19～26偈
- 33) Vegavatī …計8偈
第12章17～18偈
第19章47偈
第23章36～40偈
- 34) Bhujaṅgaprayāta …計5偈
第19章42～46偈
- 35) Mixture of Pramitākṣarā and Toṭaka …計5偈
第23章16～20偈
- 36) Praharsinī …計3偈
第11章14偈
第13章9～10偈

- 37) *Vaṃśastha*…計2偈
第15章48偈
第21章138偈
- 38) *Modaka?* (*bha* × 3 + *ra*) … 計2偈
第20章5偈(?)
第21章53偈(?)
- 39) *Bhujāṅgavijṛmbhata*…計2偈
第21章171~172偈
- 40) *Lalita* or *Dohā*(?)… 計2偈
第15章31~32偈
- 41) *Svāgatā*…計1偈
第5章79偈
- 42) *Vaṃśamālā*…計1偈
第15章37偈
- 43) *Drutavilambita*…計1偈
第15章27偈(?)
- 44) *Candravartman* [*ya-gaṇa* で終わる形式] …計1偈
第20章8偈
- 45) *Rucirā*…計1偈
第15章52偈
- 46) *Āryā Vipulā*…計1偈
第22章1偈
- 47) 6 + 4 + 4 + 2 *moras* + (7 *gaṇas*, 8*gaṇas*, 9 *gaṇas*)
第15章33偈(?)

以上の集計結果から Lv に含まれる韻律数は47種であり、番号を付して示されうる Gāthā (偈頌) の総数は1517偈であることが分かる。これらの韻文全体を鳥瞰して、Lv に見られる韻律の特徴を示せば、次のようにまとめることができる。

- ①非常に多種多様の韻律が使用されている。このことは、Lv が起源的に多くの典拠や作者を有する雑多な文献であることを示すものである。
- ②最も多用されている韻律は Vasantatilakā であり、作品全体にわたって幅広く使用されているが、特に第21章（降魔品）に頻出している点が注目される。
- ③一般に最も代表的な韻律とされる Śloka も、第24章（トラブシャ・パツリカ品）を中心として多用されているが、全体としては Vasantatilakā よりも少ない数にとどまっている。
- ④三番目に多用されている韻律は Āryā (Pathyā) であり、Śloka と並んでメジャーなこの韻律が多用されていることは、Lv が文学作品に共通する韻律の一般的特徴をいちおう保持していることを示すものである。
- ⑤しかし、名称不明とせざるを得ないようなマイナーな韻律も少なからず含まれており、このことは Lv が他の作品には見られないような特徴を持つことを示すものである。
- ⑥四番目に多用されている「Upajāti と Vaṃsamālā が混合した韻律」を含め、複数のリズムを混合した韻律が種々見られることも、Lv の特徴として注目される。
- ⑦五番目に多用されている Śārdūlavikrīḍita は19音節から成る比較的長い Pāda の韻律である。偈数は少ないとしても、一つの Pāda (1行) に26もの音節を有する Bhujaṅgavijrmbhata や⁹、それより多くの音節を有する Daṇḍaka 等も含まれていることを考えると、Lv は技巧的に高度な韻律を多彩に駆使した作品であると言える。
- ⑧第21章に見られる、上記の16) Gadyagati (散文調の韻律) の存在は、Lv における韻律の有する多様性を最も明瞭に示すものとして注目される。

参考文献

- ① Rajendralala Mitra (1877), *The Lalita Vistara*, Bibliotheca Indica Work No. 15, Calcutta.
- ② S. Lefmann (1902 & 1908), *Lalita Vistara I & II*, Halle.
- ③ Edited by H. D. Velankar: *Jayadāman (A collection of ancient texts on Sanskrit Prosody and A Classified List of Sanskrit Metres with an Alphabetical Index (Haritoṣamālā No. I)*, 1949, Poona.
- ④ F. Edgerton (1953), *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I & Vol. II, New Haven.
- ⑤ V. S. Apte (1957), *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Poona.
- ⑥ A.K. Warder (1967), *PALI METRE A Contribution to the History of Indian Literature*, PALI TEXT SOCIETY.
- ⑦ Śāntibhikṣu Śāstrī (1984), *Lalitavistara*, Lucknow.
- ⑧ 片山一良 (1973) 「『グットーダヤ』訳註 (VUTTODAYA) —パーリ韻律論—」(『仏教研究』第3号,

⁹ 各行が同じ形式の韻律で一行に最も多数の音節を有するものとしては、Apte の韻律表でも *Jayadāman* のリスト (139頁) でも、45音節から成る Pipīlikāmālā が挙げられている。

pp.143-105 (横書き)

- ⑨ ドゥ・ヨング著／平川彰訳 (1975) 『仏教研究の歴史』 春秋社
- ⑩ 水野弘元 (1980) 『経典 その成立と展開』 佼成出版社
- ⑪ 辻直四郎 (1982) 『辻直四郎著作集 第三巻 文学』 法蔵館
- ⑫ 辻直四郎 (1982) 『辻直四郎著作集 第四巻 言語学』 法蔵館
- ⑬ 中谷英明 (1988) 『スバシ写本の研究 亀茲国致隸藍の「ウダーナ・ヴァルガ」』 人文書院
- ⑭ 外園幸一 (1994) 『ラリタヴィスタラの研究 上巻』 大東出版社